
天国地獄事情

古都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国地獄事情

【NZコード】

N6240M

【作者名】

古都

【あらすじ】

善い行いをすると天国に、悪い行いをすると地獄に墮ちる。

そう教えられる世で、一人の男が死んだ。

悪行を重ねてきた男は地獄に墮ちることを覚悟していたが、閻魔様から天国に行きたいか地獄に行きたいかを問われる。そしてそこで知る事実。

(前書き)

おじぬやねいじとの難しさを感じておつまますが、一つや二つへお願い致します。

人間世界では、生きている間に善い行いをしてきた者は、美味しい食べ物に溢れ花の香も漂う美しい自然に囲まれた幸せな楽園”天国”に昇るとされ、逆に悪い行いをしてきた者は、味気ない砂のような食べ物に鼻も曲がるおぞましい臭い漂う荒れに荒れた廃墟”地獄”に墮ちるとされている。それゆえ人々は、死後に天国に昇れるよう、善い行いを進んできることを教えていた。とはいっても、本当に天国や地獄が存在するかは死んでから初めて確認できるもので、この存在を疑い悪い行いを続ける者もかなりの数いたのである。

ここにまた、教えを疑い悪行を重ねてきた一人の男が死を迎えるとしていた。男は幼い頃に両親を亡くしており、自力で生きるために何度も盗みから強盗、時に殺人まで一通りの悪行をこなしていた。たつた今も、食糧を求めて畑に忍び込み、盗みを働いていたところである。男にとって、いつもなら何てことはない盗みだったのだが、今回は運が無かつた。獲物を抱え畑から逃げる際、足元にいた蛇に気付かず踏みつけてしまったのである。男は足を取られその場に転んでしまったのだが、その時、踏みつけられて怒った蛇に足を噛みつかれてしまつたのだ。この蛇はあたりでも有名な毒蛇であり、噛まれたらたちまち意識を失い死に至ることが知られていた。男もそのことは重々承知しており、薄れゆく意識の中、これまでの人生を振り返りつつ死後の世界について思いを巡らせた。男は天国や地獄なんてものが存在するとは思つていなかつたが、仮に存在するとすると、悪いことばかりやつてきた自分は確実に地獄に墮ちるのだろうと思つた。そこはどれだけ辛い場所なのだろうか。噂では針の山を素足で歩かされたり、煮えたぎつた風呂にも沈められることがあるという。男は死ぬ間際になつて初めて善行を行つてきた方が良かったかもしれないなと思つたが、今となつてはどうにもならず、そのまま静かに息を引き取つた。

男の意識は、しばらく無であった。何時間単位かか何日単位か、それとも何分単位であったか。時間の程度は分からぬが、しばらく意識の無い状態が続いたのである。男が知ることは永遠に無いが、実はこの無であった時間は、人の死後の進路を司る閻魔様が新しい死人を受け入れる手続きを取るのにかかった時間なのであった。そして男は、再び意識を取り戻した。男は、自分が目を覚ますことは二度とないと思つていただけに大変驚いた。大変驚いたが、目の前に対峙しているモノに気が付き、もうひとつ驚いたのである。そのモノは、人間世界でいう唐の官人の様な衣を纏い、赤い肌をした顔面には鬱そうとした髭と大きな牙を生やしている。そして何より、自分の身の丈よりも一倍はあろうかという大きさである。生きている間に聞いたことがある、閻魔様の姿そのものであった。その閻魔様が大きい口を開き、濁声で男に語りかける。

「わしはこの閻魔堂の主にして人の死を司る、閻魔である。今からお前が天国行きか地獄行きかを決めてやる。どちらか希望はあるか？」

男は死ぬ間際にも思つた通り、出来れば天国に行きたいと思つた。しかし、それをそのまま馬鹿正直に言つていいものか。男は、自分が今裁かれている立場であることを踏まえ、その問い合わせてこう答えた。

「閻魔様。私は今まで悪い事ばかりして参りました。天国に行き幸せになりたいとも思いましたが、やはり、地獄に墮ちてしかるべき罰を受けるべきです。私を地獄に墮としてください」

男は、天国に行きたいと答えるよりも、反省の色をみせることで逆に天国に行かせてくれるのではないかと考えたのだ。それに仮に無理だったとしても、地獄に墮ちることはもとより覚悟の上である。それに対する閻魔様の返答は、男にとつてまったく考へることの無いとても意外なものであった。

「ふむ、その素直さは大変素晴らしい。それに、これまでの経験を見ると確かに地獄行きが相応しいと言える。昔なれば知らず、こ

「最近は天国に行つた後にも地獄行きを希望するものが後を絶たず、すっかり人気の行き先になつてしまつたが……」

閻魔様は続ける。

「よろしい。その心意氣、その経験に免じ地獄行きを許可しよう。左側にある通路を歩いて行きなさい」

閻魔様がそう言い終わると、男の左側に道が現れた。その道は、これまで持つていた地獄の印象とは程遠い、整備されたアスファルト道路であった。

男は困惑した。自身の口論見もまんまと外れ、覚悟していた地獄墮ちになつたのだが、その地獄が人気であるというはどういったことなのだろうか。それにこのアスファルト道路。地獄への道なんて、荒れた今にも崩れそうな道でも良さそうなものだつたのだが。考えてもその答えは出ない。男は思いきつて閻魔様に聞いてみることにした。

「閻魔様。私の希望通り、地獄行きを許可して頂きありがとうございます。ところで、地獄が人気の行き先というのはどういったこのなのでしょうか。私はこれまで、地獄の生活はその名の通り、牢獄での生活に等しい過酷なものだつうと思い、またそのように聞き育つてたのですが、そうでは無いのでしょうか？」

閻魔様は顔をしかめて答えた。

「昔前まではその通りだつたのだ。しかし、地獄に墮ちる人間の欲というものが凄まじ過ぎたのだ。天国に昇つた人間は、元々満たされた人生を送つてきた者たちなのだが、天国でもその生活に満足し、あえて行動せず与えられるままの幸せを保つて生活してきた」そこで一呼吸を置き続ける。

「しかし地獄に墮ちた人間は、当然その過酷な生活をよしとする者などほとんどおらず、天国を羨みながら常に不満を抱えていた。そしてそのうちに、自分たちでその生活を変えていく努力を始めたのだ。まず、地獄に墮ちた農家の人が、土地を耕しより良い作物を育て始めた。品種改良に品種改良を重ね、ついに荒れた土地でもよ

く育つ作物を育てることに成功した。次に、陶芸家の人が、練りものにより土を開発し、地獄の火炎を利用して陶器の製造に成功した。ここから、金属の鋳造技術や建築技術も発達し、そのうちに乗り物や電気製品も生まれどんどん繁栄していった。そして今や、天国よりも充実した生活を送ることができる場所となつたのだ」

男は言葉を失つた。これまで、天国こそ素晴らしいところで地獄は苦しいところである、だから善い行いをしましょうと教わつてきただのに、実際はその逆で、地獄こそ素晴らしい場所となつてている。生きている人間たちがこのことを知つたらどう思うだろうか。男は考えた。おそらく、今の人間社会は一気に崩壊するだろう。こそつて悪行を重ねようとするのだろう。悪い者こそ得をするこの社会に男は可笑しさを感じ、声を上げて笑つた。ひとしきり笑うと、男は何事も無かつたかのように地獄行きのアスファルト道を歩き始め、しだいに見えなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6240m/>

天国地獄事情

2010年10月20日19時50分発行